

世界人 (Global Citizen) を育む教育とは？

～IB 教育を取り入れた地元の中高一貫校を視察～

シンガポール事務所

シンガポール政府は、その教育政策の中で、徹底した学力・能力主義を推し進めてきました。そしてその効果は、世界の企業が多額の費用を投じて、国際競争能力の高いシンガポールの優秀な人材を獲得しようとしていることにも表れています。

また一方で、学力主義を否定し、「価値観の教育」という独自の教育理念に基づいて「世界人 (Global Citizen)」を育てつつも、学力レベルは世界ランク上位に位置する学校もあります。今回は、そんな学校のひとつ、Anglo-Chinese School (Independent) を視察する機会を得ましたのでご報告いたします。

1 Anglo-Chinese School (Independent) の特徴

初等教育 (小学校) 終了後の教育課程で、中等教育と大学準備教育を行う、いわゆる「中高一貫校」です。

創立は 1886 年と歴史ある学校でシンガポールでも有数のエリート校として知られています。シンガポールの教育システムでは、GCE-O (シンガポール・ケンブリッジ「普通」教育認定試験) を経て、大学の入学資格である GCE-A (上記試験「上級」レベル) 等の受験資格を得ます。中には、IP



Anglo-Chinese School (Independent)
校舎 (外観)

(Integrated Programme : 統合プログラム) という、GCE-O を飛ばして GCE-A 等の受験資格を得られる一貫教育システムを導入している学校もあります。同校では 2004 年に、国際的に認められる大学入学資格を与えられる教育課程、IBDP (International Baccalaureate Diploma Programme : 国際バカロレアディプロマ資格プログラム) を導入しました。これもまた、GCE-O の受験に煩わされることなく、想像力やリーダーシップなど「国際人」として必要な要素を育みながら大学へ進学できるシステムです。この IBDP は主にインターナショナルスクールで取り入れられている教育プログラムで、同校のような、いわゆる「ローカル校」での導入は珍しいと言えます。

IB 資格の取得のための統一試験に合格すれば、シンガポールの国立大学はもちろん、この制度を導入し IBDP の受け入れ枠を持っている世界各地の大学への入学資格を得ることもなります。さらに同じ年、もともと男子校だった同校は、第 5・6 学年にのみ女子も編入できるようになりました。

全校生徒数 2900 名のうち約 6 割の生徒が IBDP で学び、それ以外の生徒は 4 年間の中等教育課程 (GCE-O 取得) を経て次のステップである大学準備教育課程 (GCE-A 取得)

に進む、一般の教育プログラムに基づき学んでいます。

IBDP 導入と併せ私立校ならではの特色として挙げられるのは、その教育理念はキリスト教の教えにあり、1年ごとに一つ、聖書から目標とする一説を選び出しその年の教育目標にしている、という点です。



校舎の壁に刻まれた Vision

また、学校のビジョン「A Scholar, Officer and Gentleman(Year1～4)」「A Scholar, Leader and Global Citizen(Year5・6)」～神と博愛のもとに、学識者、武官そして紳士であれ(低・中学年)、学識者、指導者そして世界人であれ(高学年)～は校内に大きく掲げられ、同校でのプログラムのすべてはこのビジョンに向かっているのだと実感します。

教員のみならず学校の全職員にこの方針を徹底し、学力重視の保護者には「学校を変えた方が良い」と指導するなど、「勉強だけでいても価値観を持たなければただのモンスター」と言い切る校長の教育に対する深く強い思いに圧倒されました。

とはいえ、同校の学力レベルは IB 資格認定試験の結果で世界ランク5位以内と、ミッションである「生徒たちに真実の光を指し示す世界有数の教育機関であること」を、まさに実現している学校と言えます。

2 多彩なカリキュラムで将来の可能性を広げる

第1学年から職業適性テストを実施、1週間に一度の Pastoral Care(牧師によるアドバイス)で人格形成をサポート、自分とは違う文化を背景に持つ人々を理解し尊敬することを学ぶ海外研修など、実に多彩なカリキュラムに驚きます。

履修科目も 1 教科につき2科目を選択する仕組みで、将来の可能性を広げるため「Holistic Development (全方向教育)」の工夫がなされています。

また、実社会で発生する問題にどう対処するかは経験を通して学ぶものという考えのもと、ACS ではボーイスカウトなど 50 を超える課外活動があり、生徒たちは少なくとも2つ以上の活動に参加しなければなりません。

忙しい学校生活の中で生徒たちを支えるシステムも充実しています。

25～35名の生徒に少なくとも2人の教員がつき、学校には3名のカウンセラーが常駐しています。生徒のあらゆる可能性を伸ばそうと用意されたカリキュラムは、生徒にとって時に高すぎるハードルとなったり、複雑な迷路になったりします。立ち止まってしまった生徒を見逃さず、受け入れ、そして再度歩き出せるよう導くことは、教員をはじめ職員たちの重要な役割なのです。

生徒たちの成長をサポートするさまざまな工夫が学校設備の面にも見られました。実験室には生徒たちが議論しやすいよう六角形の机、雨が多い気候に合わせて整備された水はけの良いグラウンド、通学時間をかけず時間を有効に使える学生寮など、快適な学習環境を整えることも、同校が掲げる「世界人」教育に欠かせない大事な要素なのだと感じました。



六角形の机（実験室）



人工芝のグラウンド



700人収容可能な学生寮

3 シンガポールにおける「世界人」教育の今後

シンガポールでは、国を形成する「人材」の育成、すなわち「教育」に並々ならぬ力を注いでいます。義務教育である初等教育から英語と母国語を学ぶ二言語教育、初等教育終了時の試験によってその後の教育課程が決められる教育システムは、「シンガポールの人材育成」に対する世界の評価を高めました。

しかしながら、その学力至上主義は、貴重な「資源」である「人材」を切り捨てるといふ弊害を生み出しました。そしてシンガポール政府は今まさに、人材切り捨ての弊害を無くすための教育制度改革に着手しようとしています。

今回視察した Anglo-Chinese School (Independent) の教育理念は、「学力」ではなく国際人としての「資質」を磨くことを第一に掲げていますが、結果としてその学力は世界トップレベルの評価を得ています。

学力の評価だけに頼らず、十人十色の個性と能力を最大限に生かす教育システムの確立が、シンガポールが大切にしている「人材」を1人も欠かさず育て上げるために必要であることを示している一つの例であるとも言えます。

世界で活躍するために欠かせない語学（英語）教育力と、教育への関心が高い国民性は、シンガポールにおける教育の質や成果の向上に効果的であることは言うまでもありません。

これまでの教育システムの利点を生かしながら、教育政策改革をどのように進めていくのか、今後の展開を注視していきたいと思えます。

(鈴木所長補佐 東京都江東区派遣)